

## 平成 31 年度大阪大学入学式 総長告辞

### はじめに

大阪大学に入学、進学されました皆さん、おめでとうございます。

本日、ここに 3,426 名の学部学生、3,000 名の大学院生の皆さんが、晴れて大阪大学の一員となりました。大阪大学総長として心から皆さんの入学・進学を歓迎いたします。また、これまで長年にわたり、成長を温かく見守り、勉学を支えてこられましたご両親やご家族の皆さま、心からお喜びとお祝いを申し上げます。

昨日、新しい元号が「令和」と決まりました。その出典である日本最古の歌集「万葉集」が脚光を浴びています。大阪大学名誉教授で文化功労者である犬養孝先生は、日本全国の万葉ゆかりの地を、生涯を通して歩き、「万葉風土学」を提唱した万葉集研究の第一人者です。今回のことで、皆さんが日本古来の文化に目を向けるきっかけになれば幸いです。

さて、皆さんは、受験という大きな試練を乗り越え、これからの大阪大学での勉学や課外活動、そして将来設計に心が弾み、希望に満ち溢れていることと思います。皆さんの前には、皆さんと同じ数の新しい道が開かれています。皆さんは在学中に多くのことを学び、経験し、豊かな見識を身につけていかれることとなります。

大阪大学で大学生活を過ごされるスタートにあたって、私から、大阪大学の特徴と、大学で学ぶことの意義について、お話いたします。

### 大阪大学の特徴

現在、大阪大学は、11 学部 16 研究科を擁する総合大学です。学部学生数は 1 万 5 千人を超え、日本の国立大学の中では最大規模です。

私が総長に就任以来掲げているスローガンである「社会変革に貢献する世界屈指のイノベーティブな大学」となることを目指して、大阪大学は日々進化し続けています。

大阪大学の源流は、江戸時代に創設された「懐徳堂」と「適塾」に見出すことがで

きます。

「懐徳堂」は、今は石碑を残すのみですが、当時の大坂の有力商人が、「町人に日常道徳を説く」ことを基本として設立した学問所です。しかしここでは、単なる道徳だけではなく、天文学や解剖学といった自然科学も積極的に研究され、世間からは、「鶴学問」とも揶揄されました。鶴とは、頭は猿、足は虎、尾は蛇の伝説上の妖怪です。「一貫性がない。」という意味でしょう。しかし、こうした幅広い学問を教育する在り様は、今日では、「教養教育」そのものであり、また、「文理融合」や「学際性」のパイオニアであったといえます。

もう一つの源流である「適塾」は、現在も大阪府中央区北浜に残っており、国の史跡、重要文化財に指定されています。町医者であった緒方洪庵が開いたこの私塾は、医学のみならず、化学などいわゆる近代科学の先見性を学ぶことができ、明治維新を成し遂げる多くの偉人を輩出しました。入学式終了後、適塾、緒方洪庵について紹介する時間を設けております。楽しみにしてください。

ここで、皆さんの心に留めていただきたいのは、この二つの学問所は幕府や藩によって設置されたのではなく、市民による市民のための学校として設立された、という事です。

そして、本学が「大阪帝国大学」として創設された 1931 年。当時の大阪は「大大阪時代」と呼ばれ、「東洋一の商業、工業の中心地」と呼ばれる世界的な産業都市へと大きな飛躍を遂げた時期でした。

そうした中、関西では京都にすでに帝国大学がありましたが、大阪の府民、市民が、大阪での高度人材の育成の必要性を説き、「大阪にも帝国大学を」と、一丸となって政府へ働きかけ、本学を近代的な高等教育機関として創設してくださいました。

大阪大学のモットーは「地域に生き世界に伸びる」ですが、このモットーは「市民が作り、市民に期待されている」ということを含めた言葉です。大阪大学は地域に深い根を張っている大学であること、この事実を皆さんは片時も忘れてはいけません。

大阪は、戦後の焼け野原からの高度経済成長を成し遂げ、1970 年にアジアで初めて万国博覧会（万博）の会場となりました。米国に次ぐ経済大国となった日本の象徴的な意義を持つこのイベントに、世界中の人々が大阪に集いました。

その直後に、大阪大学は、発祥の地である中之島から、万博の開催地となった緑の

多い千里の地にメインキャンパスを移転しました。このことは、大阪大学の一つの大きな転機となりました。

大阪では、これから先、そのポテンシャルを世界に知らしめる数々の機会が待っています。今年、主要国首脳会議（G7）に参加する7か国に、EU、ロシア、および新興国11か国を加えた主要20か国で構成するG20サミット首脳会議が大阪で開催されます。また、ラグビーワールドカップの開催地の一つにもなっています。2021年には、ワールドマスターズゲームズが開催されます。そして2025年には、再び大阪で万博が開催されます。かつての「大大阪時代」のように、大阪は世界中から注目を集めることでしょう。

そして、これからの数年間は、大阪大学にとっても、重要なイベントが続きます。

2020年には、グローバルビレッジという、国内からの学生、留学生、外国人研究者、本学教職員が一緒になって住まう、一大住居空間が誕生します。まずは、吹田市津雲台に700戸からなる建物が完成し、将来的には2,600戸まで増やしていきます。まさに、小さな世界村が誕生することになります。

また、2021年には、大阪大学創立90周年、大阪外国語大学創立100周年を迎えます。それと同じタイミングで、箕面市の船場に、箕面新キャンパスが誕生し、そこに外国語学部を移転します。市民文化施設と一体化した、新たな都市型キャンパスには大きな期待が寄せられています。

皆さんが在学する数年間は、大阪という都市が、そして大阪大学が大きく変貌を遂げ、新たに生まれ変わる画期的な時期です。この時期に大阪で過ごすこと、そして本学で勉学することの大きな意義を、皆さんはしっかりと心に留めておいてください。

## 大阪のイメージを作ったものは

さて、皆さんの中には、本学への進学を機会に、大阪で暮らし始める方も多いと思います。これから生活を始める「大阪」。皆さんは、どのようなイメージをお持ちでしょうか。テレビ等では、しばしば、「お笑いの街」「食い倒れの街」「人情の街」「阪神タイガースの街」というような捉え方がなされています。

昨年8月に、英国の有力経済誌であるエコノミストの調査部門が、「世界の住みや

すい都市ランキング」を発表しました。

このランキングは、世界 140 の都市を、社会的安定性、犯罪、教育、健康医療制度の利用しやすさ、などを基に数値化したものです。

大阪は何位かわかりますか？

第 1 位はオーストリアのウィーン、第 2 位はオーストラリアのメルボルン、そして第 3 位が大阪です。少し驚かれたのではないのでしょうか？国内から見ている「大阪」と、世界的な視点から見た「Osaka」のイメージには、実は乖離があるのです。

では、多くの日本人が持つ「大阪」のイメージはどのように形成されたのか。国際日本文化研究センターの教授で、日本文化に造詣の深い井上章一さんは、「大阪的」という書籍のなかで、いわゆる大阪のイメージは、マスコミによって作られたものであり、そのイメージが 50 年かけて全国的に定着したものである、という考察をされています\*。本来は、文化・芸能の中心地でもあった大阪が、偏ったステレオタイプのイメージを形成して全国に広がったのだといいます。もちろん、こうした考えと異なる意見を持たれる方もいることでしょう。

しかし、このことに限らず、ある情報が、それが正しいものであるか否かに関わらず、一つのイメージ、一つの事実を作り出してしまうということは、日常生活の中で当然のこととして起こります。

## フィルターバブルという概念

そのなかで、私たちは、ある情報に接したとき、その情報のみで物事を判断してしまふのではなく、さまざまな知識とあらゆる感覚を研ぎ澄まして、正しいことは何かを見極めていくことが必然的に重要となります。現代社会において、情報を入手するという行為は大変容易になりました。皆さんが携帯されているスマートフォンは、世界中のありとあらゆる情報とつながっています。近所の飲食店の評判から、地球の裏側の熱帯雨林の減少問題まで、知りたい情報が瞬時にわかります。

皆さんは、「フィルターバブル」という言葉をご存知でしょうか。私の専門でもある、情報科学分野で、インターネット上の仮想空間に対して用いる言葉です。

たとえば、あなたが、「何か」を検索したとき、検索エンジンのアルゴリズムは、あなたの性別、居住地、検索履歴などのデータから、あなたが最も望んでいるであろう情報を、上位に並べるといわれています。それを見たあなたは、それが世界のスタン

ダードだと思うことでしょう。しかし、それは、莫大な情報の中からあなたのために用意された、ほんのわずかな、限られた情報かもしれません。まるで、透明な泡の膜に閉じ込められて、望んでいない情報から遠ざけられているだけなのかもしれません。フィルターバブルとは、そのような意味です。

グローバル化、情報化が進むこの時代。そこにインターネットが果たした役割はとも大きなものがあります。しかし、「大阪」という都市のイメージをひとつとっても、本来であれば、一つのイメージに収斂されるはずなのに、国内でのイメージと世界のイメージには乖離があります。そして悲しいことですが、そのような乖離を、インターネットが助長し、人々を断絶する可能性が、ありとあらゆる事象で出てきているのです。

そのような時代に、皆さんは大学で何を学ぶべきなのでしょう。

## 大学で学ぶということ

思想家の内田 樹さんは、「街場の現代思想」という著書の中で、次のように述べています。少し長いですが、引用します。

※※キャンパスという無意味に広い空間が必要なのは、そこに行くと「自分が知りたいことが知れる」からではない。そこに行くと「自分がその存在を知らないことさえ知らなかったもの」に偶然でくわす可能性があるからである。「大学のなかをふらふらする」という作業がどうしても必要なのはそのためである。そして、キャンパスにゆらゆらと遊<sup>ゆうよく</sup>弋しているうちに、「なんだかまるで分からないけれど、凄そうなもの」や「言ってることは整合的なんだけど、うさんくさいもの」を直感的に識別する前-知性的な能力がしだいに身になじんでくる。そのことが、ある意味で大学教育の最大の目標なのである。

皆さんは、すでにインターネット上にあふれている情報を得るために大学に来たのではありません。いまだ人類が見たことのないものを見るために、考えたことのない考え方を知るために、ここにいるのです。そして、ここにいる間に、ここで得た知見を、全人類のために使うことを想定して、さまざまなことを吸収していくのです。

そのためには、多くの人と出会ってください。出会った人々と、多くのことを語り、

多くの異なる価値観に触れてください。もしかすると、いま、あなたの隣に座っている方が、あなたの生涯を通じての仲間になるかもしれません。

勉学、研究以外のこと、例えば課外活動なども大切にしてください。季節の移ろい、友人との会話、ランチの味、一つ一つの、何気ない日常に対して、鋭敏な感性を働かせて、充実した日々を送ってください。

そして、決して失敗を恐れないでください。失敗から飛躍した発明・発見はいくつもあります。あるいは挫折の中から絞り出した一つの弦きが、人間の真理を言い当てることもあります。

「本学で学ぶ過程で大きく成長したい」という皆さんの強い意欲に対し、私たちは支援を惜しみません。

大阪大学のキャンパスには、あらゆる可能性が満ち溢れています。皆さんは、この環境を最大限に活用して、臆することなく、さまざまなことにチャレンジしてください。そうすれば、きっと皆さんの将来進むべき道を見つけることができるはずです。

大阪大学での学生生活が、皆さんの将来の人生設計の羅針盤となることを切に願っています。

皆さんが、ほほえみをたたえ、大阪大学のキャンパスを歩いている姿に出会えることを、私は、心から楽しみにしております。

皆さん、一緒に大阪大学で学んでいきましょう。

本日は、誠におめでとうございます。

2019（平成31）年4月2日

大阪大学総長  
西尾 章治郎

（※は、井上章一氏の『大阪的「おもしろおばはん」はこうしてつくられた』（幻冬舎新書、2018年）を参考としています。）

（\*\*は、内田樹氏の『街場の現代思想』（文春文庫、2008年）から引用いたしました。）